

「男、突っ走る！」

第18回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

松西	滝杉高松志山田濱	木木	木
野澤	山階井田辺崎口	内内	内
隆	由優康 悠一良寧	健真	雅
進雄	紀恵菜行武喜磨樹々	次郎保	也
(57)	(17)	(13)	(17)
(53)	(17)	(44)	(17)
中央高校2年2組副担任	中央高校2年2組生徒	雅也の弟	中央高校2年2組生徒
中央高校2年2組担任	中央高校2年2組生徒	雅也の母	

1 中央高校・全景

N「1年が明けて、三学期が始まりました。冬休みの間に校舎の耐震工事も終わり、三学期初日に僕たちの生活は、また元の教室でスタートしたのでした」

2 同・2年2組教室

優菜が雅也に原稿の入った封筒を渡す。

優菜「はい、これ。お返しします。冬休みにじっくり読ませてもらいました」

雅也「どうだった？」

優菜「びっくりした。ママが、こういうベタな恋愛青春ものを書くんだって」

雅也「やっぱり、恋愛としては単純だったよね。高校生の恋愛描くの難しくて……それにさ、恋愛ドラマって結局主人公とヒロインが結ばれるか結ばれないかっていう二つの選択肢しかないでしょ。大体ハッピーエンドで終わらせようと思うと、結局二人は結ばれてチャンチャンって感じじゃん。ど

うも作品に抑揚をつけるのが苦手で……」

優菜「でも、私のあの木漏れ日さす木の写真からここまで物語を膨らませたママの創作力はやっぱりすごいと思うよ」

雅也「そう言ってもらえると嬉しいわ」

優菜「また何か作品書くの？」

雅也「うん、一応ね。検定勉強もひと段落したし、しばらくは創作活動に時間かけよう
と思っ」

優菜「良いと思う。新作楽しみにしてる、けど無理はしないでね」

雅也「（苦笑して）はいはい、分かっています」

3 木内家・全景（夜）

4 同・雅也の部屋

雅也がパソコンで脚本を書いている――
――集中しており、険しい顔をしている。
と、一階から真保の声が聞こえる。

真保の声「雅、ご飯よ！」

雅也「分かった、もう少ししたら行くよ」

と、再びキーボードを打って原稿を書き始める――真保の声が聞こえる。

真保の声「ご飯冷めちゃうわよ」

雅也、渋々手を止めると、

雅也「今行く」

5 同・居間

雅也、真保、健次郎が夕飯を食べている。

真保「最近ずっと部屋にこもってるけど、一体何やってるの」

雅也「脚本書いているの」

真保「またコンクールに出すの？」

雅也「うん」

真保「宿題はちゃんとやってる？」

雅也「もちろん。そりゃ検定までもうすぐだから、試験勉強だってやってる。上手くフランスとりながら、なるべく脚本も書くようにしてる」

真保「よくそんなに物語が思い浮かぶわね」

健次郎「どうやって書いてるの？」

雅也「歌とか、新聞の記事とか、あと写真とか……いろいろ考えてると、自然と降ってくるものなの」

健次郎「へえ」

真保「誰に似たんだろうね。私も父さんも運動部出身で、誰も文章を得意としてる人なんてうちの親戚にいないのにね」

雅也「確かに。うちの家系、誰一人文系の人いないわ」

真保「あまり根詰め過ぎちゃダメよ。それに夜なんて乾燥して寒いんだから、風邪引かないようにしなきゃ」

雅也「はいはい、分かっています」

6 中央高校・全景

7 同・二年二組教室

西澤が授業をしている——合間合間で

咳払いをしている。寧々、机の上に何かを書いている。それに気づく雅也。

× × ×

授業終了後。

雅也、寧々のもとへ行くと、

雅也「濱口」

寧々「何？」

雅也「さつき、何数えてた？」

寧々「え？」

雅也「机に何か書いてなかった？」

寧々「ああ、これよ」

と、机に正の字が何個も書かれている。

雅也「何これ？」

寧々「西澤が、授業中に何回咳払いしたか数

えてたの」

雅也「（呆れて）暇かよ。そんなこと数えて

たの」

寧々「今日はね、一昨日の授業より三回少な

かったよ」

雅也「別にそんなこと聞いてるんじゃないよ。

でもこれ、データ化してグラフにしたら面白そうかも」

と、寧々の一つ前に座る生徒・滝由紀

恵（17）が振り返ると、

由紀恵「木内ダメだよ、そんなこと言ったら。

寧々が冗長するから」

雅也「まあそれもそうか」

N「クラスメイトの滝由紀恵。昨年から同じクラスで話す機会は少々ありましたが、二年生になってからその機会は少しずつ増えていました」

寧々「でも、グラフにしたら面白そうかもね」

雅也「余計なこと言っちゃったな。（と咳を

出し始める）」

寧々「ママ、大丈夫？」

雅也「（陰しい顔をして）大丈夫。ちょっと乾燥してるだけだから」

心配そうな顔の寧々と由紀恵。

血色の悪い顔をした雅也が個室から出てくる――一磨が手を洗っている。

一磨「木内、大丈夫。何か顔色悪いよ」

雅也「そうかな……」

一磨「何か今にも倒れそうだよ」

雅也「大丈夫だって……」

一磨「保健室行こうよ」

9 同・保健室

一磨に連れられて雅也が入ってくる――

――一磨、辺りを見回すと、体温計を見

つけ、雅也に渡す。

一磨「一回、熱図ったら？」

雅也「うん……」

と、体温計を脇に挟む。

雅也「授業、大丈夫？」

一磨「良いよ、少し遅れていけば良いから」

雅也「ごめんね」

一磨「本当に顔色悪いよ。早退したほうが良

いんじゃない？」

雅也「大丈夫だって（と咳き込む）」

と、体温計の通知音が鳴る——雅也と

一磨、体温計を見る。三十八度になっ
ている。

一磨「熱あるじゃん。ちょっと先生呼んでく
るから、木内休んでな」

と、ベッドに雅也を寝かせると、出て
いく——咳き込みながら、苦しそうに
横になる雅也。

10 道を走る軽自動車

真保が運転している。

11 中央高校・保健室

一磨と真保が入ってくる——カーテン
を開け、ベッドで横になっている雅也
の元へ来る。

真保「大丈夫？」

雅也「うん……」

一磨「今、先生が教室に荷物取りに行ってく

れてるから」

雅也「ありがとう……（と激しく咳き込む）」

12 木内家・雅也の部屋

雅也がベッドで横になっている。

N「母に連れられて病院に行った僕は、医者から胃腸風邪と診断されました。ここしばらくの乾燥した空気や、根詰めて脚本を書いたことが仇になったのかもしれない」

13 中央高校・全景

N「幸い大事に至らず、一日学校を休んだ後、風邪もすっかり治り、僕は完全復帰して学校へ登校したのでした」

14 同・2年2組教室

西澤がプリントを配っている——雅也、プリントを受け取ると、内容を見る。
『マラソン大会について』と書いてある。

西澤「はい来週から、マラソン大会の練習が始まります。六限終了後に、体操服に着替えて全校生徒はグラウンドに集合してください。朝のホームルームの連絡は以上です」
と、出ていく。

雅也「マラソンか……」

康行「もうこの時期が来たか……」

一磨「やだよね……」

良樹「しかも練習を休んだ人は、本番の日の翌週から補習扱いで走らされるのが納得いかない」

康行「今年は何位になるかな」

一磨「ドベは避けたいよね。（と雅也に）
え、木内」

雅也「みんな知ってるでしょ。俺が、体力テスト学年最下位だったこと。どうせドベの可能性大だよ」

良樹「大丈夫だって。多分、もっと足の遅い人もいるだろうし」

雅也「でもしょうがないか。走るしかないん

だもんね」

と、悠喜が雅也のもとへ来ると、

悠喜「一緒に走るか？」

雅也「やめとく。清水が俺のペースに合わせ
てたら、多分周回遅れになってイライラし
てくると思うよ」

悠喜「俺は別に本気で走ろうとは思わないか
らな。だって疲れるじゃん」

雅也「あれ、志田だったらガチで走ると思っ
てた」

悠喜「俺別にそこまで好きじゃないからさ、
走るの」

雅也「そうなんだ」

悠喜「ああ。しかもさ、マラソンの練習が終
わってから、また教室に戻って今度は各担
当エリアの掃除だろ。せめて掃除終わらせ
てからマラソンの練習にしろよ。疲れた状
態で掃除なんてできるわけないじゃん」

雅也「それは言ってるかもね」

N「志田の言う通り、掃除の前にマラソン大

会の練習をするというスケジュールはどう
なんだろうと疑問に感じていました。ただ
でさえ、僕は体を動かすことが苦手なのに
……。学校はどうしてこんなにも、体を動
かす行事を行うのだろうかとも思いましたが、
こればかりは従うしかありません。ですが
案の定、マラソン大会の練習は僕や運動神
経の悪い人たちにとっては、地獄のような
時間だったのでした」

15 学校周辺の道

体操服やジャージ姿の生徒たちが走っ
ている――その中で、息苦しそうに走
っている雅也、康行、一磨、良樹。

雅也「ああ、しんどい」

一磨「息が続かない」

良樹「歩こうかな」

康行「足壊れそう」

と、後ろから武が颯爽と走っていく。

武「遅いぞ、お前ら」

雅也「あれ、俺たち周回遅れか」

康行「松井、何であんなに早いんだろうな」

雅也たち、しんどそうにランニングをする。

16 中央高校・二年二組教室

帰る支度をしている生徒たち——雅也、
疲れ切って座っている。武が荷物を持
つと、

武「じゃあな（と出ていく）」

返す気力もなく手だけ振る雅也——と、

悠喜が来ると、

悠喜「あいつ、元気だな」

雅也「すごいよね、やっぱり卓球部で体使っ
てるからだろうね」

悠喜「帰るのも早いよな」

雅也「そうだね」

悠喜「だから暴走フェラーリなんだよ」

雅也「まだその名前使ってるんだ」

悠喜「だって、あいつ自転車の速度エグいく

らいに早いからな。あんなスピードで自転車漕いでるから、登校中に車とぶつかるんだよ」

雅也「そんな事故もあったね。確か十月ぐら
いだったっけ」

悠喜「そうそう」

雅也「けど、暴走フェラーリっていう名前の
チョイスがすごいわ」

悠喜「この間安代に話したら笑ってたわ」

雅也「（苦笑して）みんなして安代安代って、
お前の女か」

悠喜「あんな女ごめんだよ」

雅也「おいおいやめろ、そういうこと言うの」

悠喜「そのツツコミを待ってました」

雅也「任せといてよ」

と、笑い合う雅也と悠喜。

17 同・コンピュータ室

優菜が自習をしており、雅也が隣で教えている。

雅也「どうしたの、急に検定勉強教えてほし
いって」

優菜「年末の検定、私も合格してたでしょ。

だから何か自信ついちゃって」

雅也「良いことじゃん。俺は、しばらく検定
は良いかなと思って」

優菜「十分ってほど、検定受けたもんね」

雅也「それに、しばらく脚本のほうに力入れ
たいし」

優菜「それもそうだね。今日、みんなはいな
いけど、部活は？」

雅也「今日は休み。松野先生が出張で、帰っ
てくるのが夕方なんだって」

優菜「そっか。まつつんが顧問だったね」

雅也「え、松野先生のこと、まつつんって呼
んでるの？」

優菜「良くない？」

雅也「まあ、親しみはあるかもしれないけど、
俺は普通に松野先生って呼ぶな」

と、ドアが開き、松野が入ってくる。

松野「あれ、二人ともどうしたの？」

雅也「松野先生、出張から戻ってこられたんですか？」

松野「うん、今戻ってきたところ。さっき職員室に行ったら、コンピュータ室で木内と杉浦が自習してるって聞いたから」

雅也「優菜が、年末の検定に合格したから力入ったみたいで検定の勉強教えてくれてって言われちゃったんです」

松野「そうか。それは良いことだ。木内もどうだ、この際一級の試験受けてみたら」

雅也「一級ですか？」

松野「来年三年生になって、一級の資格取ったら結構有利になると思うぞ。それに一級の資格を二つ以上持っていれば、卒業式の際に表彰されるぞ」

雅也「え、そんなことあるんですか？」

松野「二冠達成すれば賞状がもらえるし、頑張って一級を三つ取れば三冠達成で、これもまた表彰されるんだ」

雅也「なるほど」

松野「せっかくあと一年近くあるんだ。それに木内のスキルだったら、一級受けても大丈夫だと思うぞ」

雅也「先生」

松野「まあ、一度考えてみてくれ。部屋使い終わったら、消灯と鍵閉めだけちゃんと頼むぞ」

雅也「はい」

と、出ていく松野。

雅也「一級か……」

優菜「まつつんがああやって言ってくれてるんだったら、受けてみたら？」

雅也「やってみようかな。また、いつも通り脚本と検定勉強っていう感じでやれば良いんだから」

優菜「そうだよ。それに一級二つ以上取ったら、表彰されるんでしょ。それだけ頑張ったら、三年間情報活用コースで頑張った証になるじゃん」

雅也「そうだよね……頑張ってみるか！」

笑顔で頷く優菜。

18 木内家・全景（夜）

19 同・雅也の部屋

深夜一時。

雅也が検定の勉強をしている——と、時計を見る。

雅也「もう一時か……。風呂入って寝ようかな」

と、起き上がると、激しい腹痛が雅也を襲う。

雅也「あ……痛い……」

と、下腹部を押さえる。

雅也「痛ってえ……」

と、冷や汗をかきながら出ていく。

20 同・居間

雅也が下腹部を押さえながら入ってくる

ると、その場に倒れこむ。

雅也「痛ってえ……」

と、真保が入ってくると、雅也を見て、

真保「（慌てて）どうしたの？ 雅ッ？」

雅也「お腹が……痛い……」

真保「え、どのあたり……？」

雅也「下の……ところ……」

と、健次郎が入ってきて、

健次郎「お兄ちゃんどうしたの？」

真保「救急車呼ぶから、すぐ待ってて」

健次郎「お兄ちゃん大丈夫？」

雅也「大丈夫くないかも……」

健次郎「ええ……」

雅也「いったあ……」

健次郎「お兄ちゃん……」

激しく痛がっている雅也。

21 夜の道

雅也を乗せた救急車が走っており、その後を真保が運転する軽自動車走っ

ていく。

22 救急車の中

ストレッチャーで横になっている雅也に、救急隊員が処置をしている。側で付き添っている健次郎。

健次郎 「お兄ちゃん……」

意識が朦朧としている雅也。

23 市民病院・表（夜）

雅也を運んだ救急車が入っていく——その後をついていく美保の運転する軽自動車。

つづく